IcjLe 2011 China

第十届 世界日语教育研究大会

INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LANGUAGE EDUCATION

大会マニュアル

期間：2011年8月19日（金）～8月21日（日）
主催：中国日本語教学研究会
場所：天津外国語大学

日本語教育国際研究大会 2011

【第十回世界日本語教育研究大会】

International Conference on Japanese Language Education

異文化コミュニケーションのための日本語教育

2011 年 8 月 19 日（金）—21 日（日）

中国　天津外国語大学

主催：中国日本語教学研究会
（社）日本語教育学会
Association of Teachers of Japanese(ATJ)
Association of Japanese Language Teachers in Europe e.V.（ヨーロッパ日本語教師会）
韓国日本学連合会
Japanese Studies Association of Australia(JSAA)（豪州日本研究学会）
Canadian Association for Japanese Language Education(CAJLE)（カナダ日本語教育振興会）
台湾日語教育学会
香港日本語教育研究会

助成：日本国際交流基金会

後援：中国教育部、日本文部科学省、在中国日本国大使館、天津市人民政府
天津市教育委員会、社団法人茶道裏千家淡交会

協賛：カシオ（上海）有限公司、北京日立北工大信息系統有限公司
全日本空輸株式会社、高等教育出版社、外語教学与研究出版社
人民教育出版社、大連理工大学出版社、日中文化交流センター
北陸大学、アークアカデミー、天津外語電子音像出版社

王潇潇	大連外国語学院軟件学院	「使役型てもらう」構文習得における中間言語の研究	21 日 15:35-15:53 W303	上 780－781
王耀振	天津外国語大学日本語学院	日中両言語が共有する漢語動詞の自他の相違について	21 日 15:55-16:13 W303	上 486－487
LUKAMTO Yuliana Rejeki	大阪大学大学院 言語文化研究科	談話標識「なんか」について —日本語教育における観点から—	21 日 16:15-16:33 W303	上 784
王忻	杭州師範大学外国語学院	中国人学習者の誤用分析二種	21 日 16:35-16:53 W303	上 785－786
孫楊	扬州大学外国語学院日本語学部	依頼の言語的スタイルに関わる要因	21 日 13:30-13:48 W304	上 787－788
青木志穂子	九州大学大学院 比較社会文化学部	イエズス会宣教師ロドリゲスの日本語「敬語」の捉え方 —『日本大文典』における“modo de falar”の分析を通て—	21 日 13:50-14:08 W304	上 789－790
谷智子	大阪大学言語文化研究科	日本語母語話者間会話の話題選択・展開にみるポライトネスの変化 —初対面からの継続的対面データをもとに—	21 日 14:10-14:28 W304	上 791－792
瀋旭映	寧波職業技術学院外国語学部	「へ」格の意味用法について —「へ」で終わる文の意味特徴を中心に—	21 日 14:30-14:48 W304	上 803－804
初相娟 玉岡賀津雄 大和祐子	天津外国語大学日本語学部 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科	中国語を母語とする初級日本語学習者のテ形習得とその文法能力に及ぼす影響	21 日 14:50-15:08 W304	上 795－796
楊暁敏	復旦大学日本語学部	「形容詞連用形＋V すぎる」の特性に関する一考察	21 日 15:15-15:33 W304	上 797－798
大谷鉄平	全州大学校言語文化学部	呼称としての「先生」のバリエーション —日・韓比較調査を踏まえた、日常語教授の一考察—	21 日 15:35-15:53 W304	上 799－800
Franky R. NAJOAN	政策研究大学院大学	インドネシア人学習者を対象とした音声指導の効果 —母音の長短の知覚に焦点を当てて—	21 日 15:55-16:13 W304	上 801－802
フェヂャニナ ウラドレナ	モスクワ市教育大学 東洋学学部日本学科	科目として日本語史の内容・目的	21 日 16:15-16:33 W304	上 1023

インドネシア人学習者を対象とした音声指導の効果

―母音の長短の知覚に焦点を当てて―

The Effect of Phonetic Instruction on Indonesian Students: With Focus on the Perception of Japanese Long and Short Vowels

政策研究大学院大学　Franky R.NAJOAN
doc08014@grips.ac.jp

キーワード　音声指導、語聴、長音位置、ピッチ変化

1．背景と研究の目的

日本語の母音の長短はインドネシア語話者にとって習得困難な項目である。先行研究では，特に語末の長音の聞き取りが難しいこと，ピッチ変化のない長音のほうが変化のある長音より聞き取りにくい傾向があることが指摘されている（Najoan,2009）。

発表者は，インドネシア語を母語とする日本語学習者に対し，母音の長短に焦点を当てた音声指導を行った。本発表ではその効果を検証するとともに，日本語の長音・短音の誤聴傾向を，長音内のピッチ変化とも関連付けて調査した。

2．研究方法

2.1 研究の手順

2010 年 10 月～2011 年 1 月にわたりインドネシアの日本語学習者を対象に指導を行った。指導の概要は、①長音のピッチ変化に関する知識を与えること、②短音・長音の聞き分け練習を行うこと、③短音・長音の発音練習を学習者間でお互いピアでフィードバックを行うこと、の 3 点に要約できる。③の発音練習について、教師のフィードバックではなく、ピアのフィードバックを導入したのは、音声指導の専門知識や経験のない教師でも導入できる練習方法の効果を実証し、インドネシアの日本語教育全体への波及を企図するためである。指導は、全部で 12 回、毎回 20 分の練習を行った。指導終了後、指導を受けた実験群（20 名）と指導を受けなかった統制群（20 名）に対し同一のテストを行い、その結果を比較することによって指導の効果を検証した。

2.2 テストの方法

効果の測定として、104 語の聞き取りテストを行った。テスト項目の単語を聞かせて、単語内のどの母音が長いかを判定させた。解答は筆頭者が採点した。

テスト項目として、2～4 拍の実在の単語 104 語を使用した。アクセント型（頭高型、中高型、平板型）、長音位置（語頭、語中、語末）、及び長音部分のピッチ・パターン（HL：高低、HH：高高、LH：低高、LL：低低）について、偏りがないように選定した。104 語に含まれる音節の内、長音が 90 音節、短音が 172 音節である。

3．結果と考察

表 1 に示すように、長音を短音と聞き誤る誤聴率は、実験群が 13.4%であるのに対して、統制群が 30.8%であり、両群の平均値について *t* 検定を行った結果、有意差が見られた（t=5.172、p<0.01）。また、短音を長音と聞き誤る誤聴率についても同様に有意差が見ら

表１　長音と短音の誤聴率(%)

	グループ	N	平均値	標準偏差
長音を短音とする	実験群	20	13.4	6.1
	統制群	20	30.8	13.7
短音を長音とする	実験群	20	4.5	2.8
	統制群	20	9.2	5.6

れた（実験群 4.5%、統制群 9.2%；t=3.209、p<0.01）。実験群は統制群より母音の長短の聞き取り能力が高く、指導は母音の長短の知覚に一定の効果があったことが示唆された。

また、長音の誤聴を長音の位置別に見た結果は表２の通りである。実験群も統制群も語頭・語中位置と比べて語末に位置する長音の誤聴率が高かった。この結果は先行研究（例：小熊 2008）と同様、語末の長音の知覚が困難だということを示している。

表２　長音位置別による誤聴率(%)

カテゴリー		実験群(20名)		統制群(20名)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
長音を短音とする	語頭	5.5	5.3	14.8	12.7
	語中	9.1	8.9	17.5	15.7
	語末	21.4	8.7	48.3	17.7
短音を長音とする	語頭	5.3	3.8	12.4	9.1
	語中	12.4	7.1	9.2	5.1
	語末	6.7	2.2	5.2	4.9

語末の誤聴率を群間で比較すると、統制群(48.3%)より実験群(21.4%)よりの方が有意に低く（t=6.100、p>0.01）、指導を受けた実験群についてはかなりの改善が見られた。

次に、表３に長音のピッチ・パターンと誤聴率との関係を示した。実験群・統制群ともに，ピッチ変化のない HH,LL 型の誤聴率のほうがHL,LH型より高い。一方，統制群と実験群とで比較すると，どのピッチ型同士で比較しても統制群の方が誤聴率が高く，HL を除き、全ての差が有意であった（HH,LL は p<0.01、LH は p<0.05）。ここから，実験群・統制群ともにピッチ変化を手掛かりとして長音を認知している可能性があること，実験群についてはピッチ・パターンにかかわりなく指導の効果が表れていることが示唆される。

表３　長音のピッチ・パターンによる誤聴率(%)

カテゴリー		実験群(20名)		統制群(20名)	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
長音を短音とする	HH	17.5	9.4	36.7	19.1
	LL	27.2	12.5	64.2	19.1
	LH	8.1	8.7	21.7	18.5
	HL	5.2	6.1	11.7	9.4

今回の調査では、聞き取り練習とピアフィードバックによる発音練習が聞き取りの改善につながることが示されたが、これが産出の改善にもつながるかどうかは今後の大きな課題である

参考文献

小熊理恵(2000)「英語母語話者による長音と短音の知覚」『世界の日本語教育』10、p.44-54
Najoan Franky (2009)「インドネシア語を母語とする日本語学習者における日本語の母音の長短の聞き取り」『日本音声学会第23回全国大会予稿集』p.39-44